



第2號  
 月1回發行  
 ひの心を繼ぐ會  
 〒791-0510  
 住所:愛媛縣西條市  
 丹原町丹原 50-1

綱 領

一 私達は明德を明らかにします  
 一 私達は國家の鎮護となります  
 一 私達は大和世界を建設します

神道(一) (大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記 はじめに(一)

「トインビーとの對話」と三島由紀夫氏の自刃

昨年は皇紀二六三〇年、西曆一九七〇年の「〇」零の歳で、未だ「一」にならぬ<sup>ほち</sup>孕みの時であつたが、果して何を孕んだであらうか。私は二つの事を重大視してゐる。一つは毎日新聞に連載された「トインビーとの對話」であり、一つは三島由紀夫氏の自刃である。一つは最も日本から離れた地球の裏側からの呼びかけであり、一つは日本内部の核の<sup>げきはつ</sup>激發であつたが、その<sup>げんてん</sup>原點を一つにしてゐる。未來への孕みが、宇宙<sup>うちゅうじつそろうけんげん</sup>實相顯現の孕みがここにあると私は信じてゐる。未來への孕みが、宇宙<sup>うちゅうじつそろうけんげん</sup>實相顯現の孕みがここにあると私は信じてゐる。

「トインビーとの對話」(六〇)には、「貴重な日本の神道」との見出しで次のやうに書かれてゐる。

「有神論と技術が尊重される西洋世界においても、宇宙の背後にある精神的存在の具現としての自然に對する原始人の崇敬をいまなほ保持し、あるいは復活した何人かの天才的宗教家、詩人がゐます。私はすでにアシジの聖フランチェスコの詩を紹介しました。この詩は神を、わが兄である太陽、わが妹なる月、わが隣人同僚である植物、海、風などの創造とたたへたものです。

私は、十九世紀英國の汎神論詩人ウィリアム・ワーズワースもあげました。地球上のすべての生命について神に感謝する聖フランチェスコの賛歌、「不滅の生命の啓示」と題しながら、實は<sup>ねはん</sup>涅槃の啓示を描いたと思はれるワーズ

ワースの詩には、現代の西歐世界、いや現世代のすべての人類に對する教へがあると思ひます。ワーズワースが涅槃について知つてゐたかどうかはわかりません。しかし、ワーズワースが描かうとしてゐるもの、復活させようとしてゐるものは、不滅の生命<sup>かん</sup>に關するキリスト教の概念ではなく、涅槃に關する佛教の考へ方です。

神道の總本山である日本の伊勢神宮を訪れる時、私は、ここにこそ聖フランチェスコやワーズワースが生命をよみがへらさうとした宗教の形が脈々と生き續けてゐると感じるので。伊勢を訪れる人が感得する精神は、現代人が自然に加へた<sup>じやあく</sup>邪惡な暴力に對して自然が復しゅうするのと思ひとどまらせるために、現在生きてゐる世界中の人々が求めていかなければならない精神なのです。」

と。そして、インドの、蚊も殺さず、間違つても<sup>ちゅう</sup>コン蟲を吞まないやうに、口に布をあててゐる、極端なまでのジャイナ教にふれ、

「現代世界は、インドのジャイナ教と日本の神道から何ものかを學ぶべきだと思ひます。」と結んでゐる。

ジャイナ教は、生命を尊重する點においては徹底した宗教であるが、日本の神道は、現代人が自然に加へた邪惡な暴力に對して自然が復しゅうするのと思ひとどまらせるために、現在生きてゐる世界中の人々が求めていかなければならない精神なのである。自然が復しゅうするのと思ひとどまらせるのは何によるのか。現代人が自然に加へた邪惡なる暴力に對する反省であり、懺悔である。自然への崇拜、歸入である。彼はそれを、「非人間的自然を通じての究極的實在崇拜」といひ、「神道の本來の形でゐまなほ護持しているといふ點で、日本は幸運です。」と言ふのである。非人間的自然とは何か。花鳥風月である。木の神久能智神、火の神迦具土神、土の神石土毘古神、金の神金山毘古神、水の神彌都波能賣神などから、すべての物と現象に神靈をみとめて、

それを通じてその根元の唯一絶対の實在、天之御中主神を認識體得して、禮拜歸入することである。更に天之御中主神の最高の顯現として稜威かがやき給ふ伊勢神宮に鎮まります天照大御神、萬物育成の大御祖であらせられる。ここに、一神即多神の宇宙の實相があり、この實相を地上に顯現してある日本がある。

戦後の日本が民族の神を放擲して貧兒に倣つてある時に、近世での最大なる歴史哲學者トインビーは日本の神道の貴重を日本に呼びかけたのである。時も時、この論文が終らんとした頃、日本の内部の原點において、核の爆發が行はれたのである。

(以下次號)

天地の あやに奇しき ことわりを

のぶるは大和 日の本の國

ひでを

櫻匂ふ 大和武夫の 道をおきて

吾ゆく道は あらじとぞ思ふ

ひでを

## 農士道 二

菅原 兵治

### 自序

この書を刊行するに當つて、私にとつては忘れ難き追憶が伴ふ。

もう十幾年かになる。金鶏精舎淨窓の下に、寂かに東洋先哲の學に浸りつつ、農村生活に何とかして深い證悟を得たいと念ひ續けてみた時であつた。偶々秋の一夜、池畔の石上に孤座して、寒水に落つる星影に見入つてゐた瞬間、不圖心耳に叫かれたのが、「農士道」の籟であつた。それは、其の時の私にとつては、實に天籟と思はるるうれしきであつた。それから十幾年を経た。其の間、此の「農士道」は漸次に成長し續けて來た。そして此處菅谷の莊に日本農士學校が創立せられてからでも早や八周年になる。

農士道とは、一部の人々に曲解せられてあるやうな、徒に形の上で武士の眞似事をする百姓になることではない。それは一言にしていへば、東洋道德の精髓たる「士道」を農的生活の中に實現せむとするの道の謂である。そして又苟も道たる以上、單なる知識や理論ではない。隨つて其の參究には、知と共に、證と共に修を以てせねばならぬものである。幸、此の日本農士學校の經營に従ひつつある私は、敬慕する鎌倉武士畠山重忠の城跡たる由緒深き此の校地に於て、師友と與に、各地より清集の健兒の育英と、二十餘町歩の農場の仕事とに直接しつ日夕してゐることは、得難くも尊い其の修行であり得たことである。かくて開校前の研究は、此の修行によつて、更に絶えず鉗槌せられ、叱正せられ、補修せられて、其の刊行といふやうな心は、今までは何とすすめられても起り得なかつた。然るに、歸郷せし當校出身者も漸く家郷の齊治に當るやうになり、それに一方各地同人からの切なる勧めもあるので、今回其の原理的部面の肝要を編して上梓することにしたのである。

本書の内容に就いては、此處に改めていふ必要もないが、ただ特に意を用ゐた左の諸點を記して置きたいと思ふ。

一、從來の農村問題に關する研究は、一事々に就いてのそれは随分精細に行はれてゐたが、農の生活全面に涉つて、一貫の原理を以ての考察が缺けて居つたやうに思ふ。本書の所述は假令粗硬の憾はあるにせよ、終始、一貫の原理によつて各問題を究明したつもりである。

二、我々日本人は今や大きく東洋の——之を通して世界の——自覺に立つべき時である。日本精神は其の本質に於て徒らに偏狹なる獨善に陥るものではない。一切を攝つて之を道によつて鼎新して行く力こそ大和心たる日本精神である。かくて本書所論の資料は努めて廣く之を東洋先哲の學に仰ぐこととした。

三、「哲人の如く考へ、野叟の如く語る」といふ語があるが、本書の敘述は師友よりの懇な注意もあつたので、努めてしかすることに意を用ゐた。その爲に餘儀なくされた冗長な點は恕されたい。

四、本書は何れかといへば農教原理篇である。私は之と相待つて、其の實際篇として、豫て調査研究中の「日本的農村」を近く發表して農政方面の研究を述べ、更に希くは私の晩年に於て「農術書」をものして、農教、農政、農術の農士道三部書とすべく企圖してゐる。此の書の内容を原理的概論に重きを置いて、餘り細部に涉らないのはその爲である。

今や擡頭しつつある新東洋に對しての日本の使命は、あらゆる點に於て誠に重い。此の時、東洋農道の研究たる此の書を刊行することは、必ずしも所以無きに非ずとの感がある。ただ愈々かうして上梓して見るとその未熟粗淺なことが深慚に堪へぬものがあるが、或は斯道開拓の鍬入れの一助ともならば幸甚である。

猶本書の成るに當つて、恩師十年の鞭正慈誨は言ふに及ばず、先輩道友の誘助に對して、深く敬謝の意を捧ぐる。

昭和十三年歲暮 菅谷莊 洗心室にて 著者識

## 一族の再建

三浦 夏南

竹葉秀雄先生といふ愛媛を代表する哲人が生まれ出でた所以は、先生の類まれなる天才と絶えざる求道精進にあつたことは論を俟たないが、人生の最深處、その根柢を考へる時、竹葉家の歴史を思はずには居られない。竹葉家は伊豫の豪族河野家の出であり、河野家はオチノミコトから發祥したと言はれる。一説にはオチノミコトは物部氏の末裔とも傳へられてをり、言はずもがな物部氏は神武天皇様の大御爲、大義親を滅する覺悟の下、朝敵ナガスネビコを誅されたニギハヤビノミコトの末裔である。萬世一系日嗣の道は、血脈とともに歴史を貫流し、家の柱となりて、各地に一族を生ぜしめたのである。竹葉先生の父君は日露戰役に使命を全うされた人であり、母君も聰明にして從順、家に仕へて竹葉家を陰で支へられた。竹葉先生が生まれ、育つて行かれた背景に一族の厚みを切に感ずる。

翻つて幕末維新の時分を省みるに、竹葉先生の慕はれた吉田松陰先生に於ても、世間では先生一代の功績が特筆され稱揚されるが、先生には偉大なる父あり兄あるだけでなく、叔父、外叔に至るまでが碩學の英傑であられた。その一族一致協力し、吉田松陰といふ日本を代表する志士を鍛へ創り成したのである。先生の祖先も遡れば、山鹿流兵法を深く學ばれた人。山鹿素行先生の生きられた時代は江戸前期であり、尊攘の氣風未だ盛んならざりし時である。隠れたる時節にあつて眞理を求め道を明らかにし、世の不遇も顧みず國體を宣布された方であつた。その不屈の志、血となりて吉田家を貫き流れ、長門の國松下村に勤皇の一族を培養したのである。この一族といふ土壤から逞しくも美しく咲き出でた櫻花こそ先哲吉田松陰にほかならぬのではないか。我々は歴史とならぬ歴史の深さに恐懼し、深き養ひの上へのみ絢爛たる開花はあるべきものと深く思はなければならぬ。

明治以後、戦前戦後を通して、西洋物質文明の流入とともに、涸渇し續けてゐるのが、郷土に根差した一族といふ土壤である。強大なる西洋列強に對抗し、國家を守り抜いて行く爲に西洋文明を攝取し、江戸時代以前に蓄積されたものを糧として近代化に近代化を重ねて來た。それも本が立ち、天業翼贊の實がある時代には良かった。

然しながら、時の流れとともに目的と手段がすり替はり、本末は顛倒して日本の爲の西洋文明が西洋文明に使役される日本へと變貌し始めた。ちやうど人間の爲に作つたはずの機械が人の仕事を奪ひ滅ぼして行くやうに。都市商工文明に毒され、郷土を省みず都會一極集中する近代の在り方は、一族を分解し、農村を頽廢せしめたのである。江戸時代に熟成され、明治の華を咲かせた日本の土壤は絶えざる酷使によつて瘦せ衰へ、戦後に至つてその息の根を止められつつある。

ギリシャ、ローマの先例を擧げるまでもなく、農を棄て、郷土を喪失した國家に行くべき道はない。根の無き花に次の季節はないのである。この重大事に眼を向け、世の滔々たる時流に抗して進まれたのが安岡正篤先生、竹葉秀雄先生をはじめとする昭和の先人である。目前の政治、經濟、戦争に世の中が騒然としてゐるとき、靜かに歴史を思ひ、百年後、二百年後の日本の根柢を培はんとされたのである。戦後七十年、文明の頽廢が全人類的に末期的症狀を現出してゐる現在であるからこそ、昭和の先人の遺志を繼承し、本質へと目を向けるべきではないか。その險しき道程は郷土に根差した一族の再建より始まるものと確信するのである。そして我々平成の皇民は及ばずながらもその道を歩みつつあることを畏くも誇りに思ひつつ、日々荒野に開拓の鍬を振り下ろすのである。



### ★活動報告

・五月十五日、勉強會を開催。

・『土居清良』を國立國會圖書館に寄贈。その他愛媛縣下の教育關係者等に寄贈。

### ★今後の豫定

・六月十二日(火) 十九時〜二十一時 『古事記』

松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一一二  
(住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四一〇)

・六月十九日(火) 十九時〜二十一時 『土居清良』

松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一一二  
(住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四一〇)

### ★一燈照隔 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

### 年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・贊助會員 一萬圓
- ・特別贊助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

